

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Blacksmiths and Iron Products in Northern Togo

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 正平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003645

トーゴ北部諸族の鍛冶師と鉄製品

和田 正 平*

- | | |
|--------------|-------------|
| 1. 問題の提起 | ii) 槍 |
| 2. 鉄生産の歴史 | iii) 刀剣類 |
| 1) 鉄生産の発達過程 | iv) 矛槍, 戦斧等 |
| 2) 鉄生産の衰退理由 | 3) 農具類 |
| 3. 鉄生産地と土製高炉 | 4) 装身具類 |
| 4. 鉄製品の種類と用途 | 5) 楽器類 |
| 1) 発火具 | 6) その他 |
| 2) 武器類 | 5. 鍛冶師と鉄製品 |
| i) 弓と矢 | 6. 結語 |

1. 問題の提起

1884年、G. ナハティガル (Nachtigal) を派遣してトーゴ南部に植民地支配を確立したドイツ政府は、1888年～98年、軍隊を内陸地方へ進め、北部諸族の平定作戦を開始した。まず、最も強力なイスラム王国を樹立していたコトコリ族の王 (ウロ=エソ)、ディアボ・ブカリ (Dyabo, Bukari) と保護条約を結び、次に、ガーナ北部、イエンディ (Yendi) に首邑を置き、トーゴ北部にも勢力を拡大していたダゴンバ王国を掃討、さらにオチ川 (Oti) 流域、サンサネ・マンゴ (Sansane Mango) の居留地から周辺地方に遠征し、しきりに奴隷狩りを行っていたチョコシ族 (Chokosi) を征服、トーゴ北部をほぼ手中に収めた。

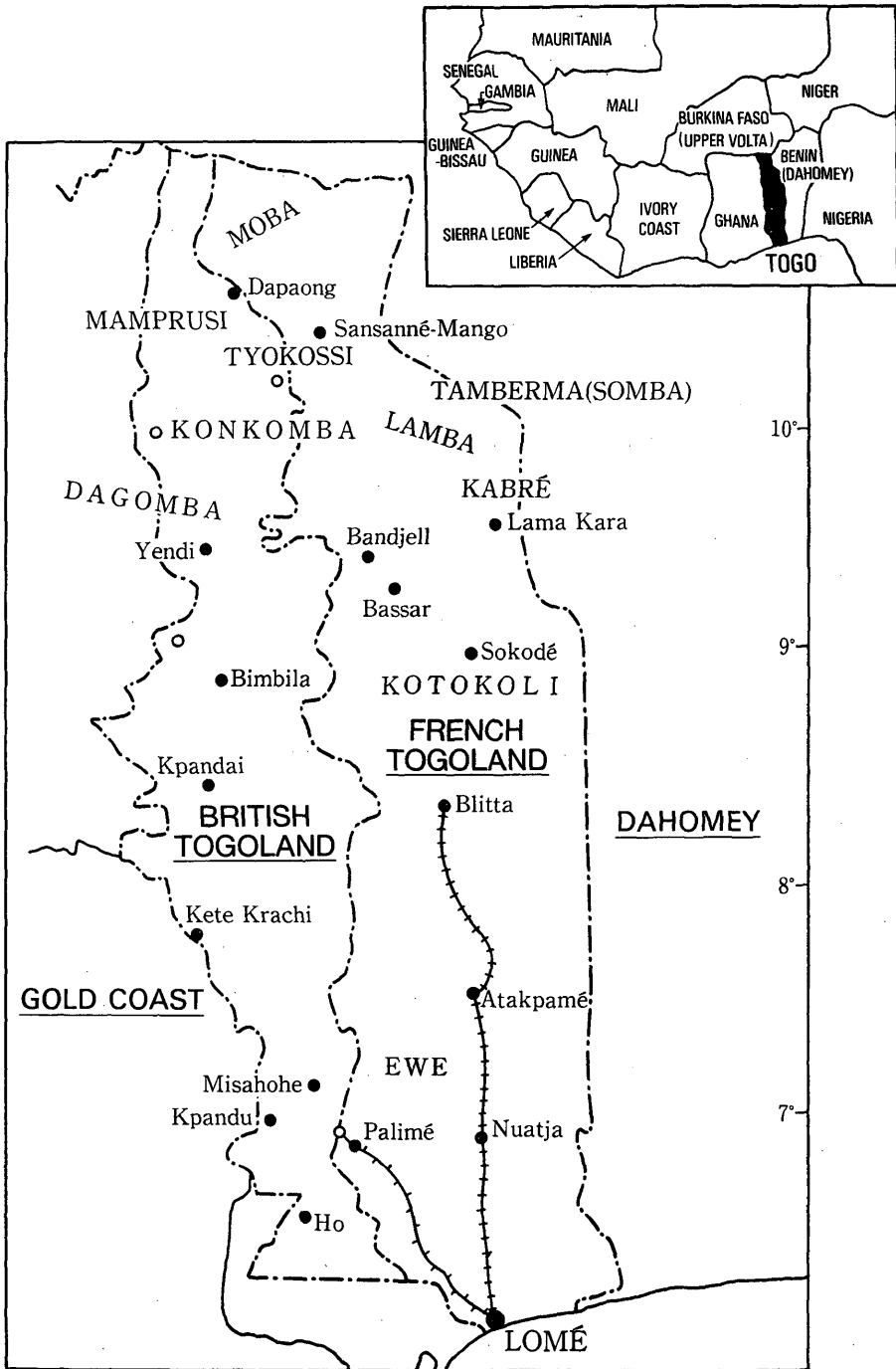
しかし、辺境に住み首長を持たない北部諸族等の平定作戦に着手した時、思わぬ抵抗に遭遇した。1897年5月にバナパルパ (Banaparupa) 市場におけるドイツ軍の発砲事件を引き金に起こったコンコンバ (Konkombaba) 族の約一年間に及ぶ反乱と呼ばれた反植民地闘争、1897年～98年にわたるアタコラ山地へ侵入したフォン・マッソ (Von Massow) とケルシティング (Kersting) が率いたドイツ軍に対するカブレ

* 国立民族学博物館第3研究部

(Kabré) 族の激しい抵抗、1900年5月、チョコシ商人の交易路を妨害したことから起こったドイツ軍とモバ (Moba) 族とのダパンゴ (Dapango) 岩層地帯の戦闘など、ドイツ軍の平定作戦は必ずしも円滑に進んだとは言えない。たしかに、略史などに記述されているように、首長なき諸族の抵抗は散発的で局地的にすぎなかったが、あちこちに潜む未知な種族の存在自体が常にドイツ政府の大きな不安材料であり、カブレ族もランバ (Lamba) 族も海岸地方では勇敢で戦争に強い種族としてある種の恐れをもって知られていた。自らほとんど攻撃に出ることはなかったが、ドイツ軍の侵入に対する防衛は固く、頑固に伝統を守り、排他的で、植民地支配に反感も強かった。故に、ドイツ政府の平定作戦は当初の計画よりも明らかに遅滞したのである。しかしながら、近代装備をしたドイツ軍が政治首長を持たない北部諸族になぜこのような苦戦を強いられたのであろうか。

J. グディによると、18世紀から19世紀にかけて西アフリカの重要な軍事技術は、1) 弓と矢、2) 槍と剣、3) 騎馬、4) 鉄砲であった [Goody 1971: 48]。このうち鉄砲は、弓矢とは比較にならない圧倒的な攻撃力を発揮する近代兵器であり、騎馬は強力な機動性をもつ軍事技術として西アフリカに普及し始めていた。西アフリカの諸王国は勢力を拡大する必要から鉄砲と馬を購入し、騎馬隊を養成して軍事力を増強していた。トーゴ北部でも、19世紀後半、6つの首長圏を統合したコトコリ族の最高首長ウロ=エソは、推定約300人の騎馬隊、約1000丁の鉄砲、そして弓矢で武装された多数の歩兵を擁していたという [Knoll 1978: 31]。しかし、こうした多大な兵力を誇っていたにもかかわらず、コトコリ王は内陸支配にむけて進攻してきた少数のドイツ軍と一戦も交えることなく保護条約を結んだ。当時の諸王国間の勢力争いから推理すると、ウロ=エソは西方に接近していたもっと強大なアシャンティ王国の脅威に備えてむしろ積極的にドイツ軍に保護を求めたとみられており、近代武器で武装されたドイツ軍の軍事力を後盾にすることを目的に保護条約を結んだと考えられる。すなわち、西アフリカ諸王国が常備していた旧式なマスケット銃とドイツ軍の携帯していた連射式ライフル銃とでは性能の差は歴然としていたのであり、戦うより保護条約を結ぶほうが得策だったのである。

ところが北部諸族のうちでも政治首長を持たず、軍事技術としても1) 弓矢、2) 槍と剣の伝統的な武器しか装備できない山地民や河辺民のほうが自己領域に侵入してくるドイツ軍に蜂起し、その植民地支配に執拗な抵抗を示したのである。それ故、ドイツ政府は、1897年にフランスと1899年にイギリスと協定を結び、東のダホメ、西のゴールド・コーストとの国境を確定し、植民地としてトーゴを領有したが、ドイツ領



地図1 英仏に分割された独領トーゴランドと北部諸族

トーゴといっても、北部地方は必ずしも平定されたわけではなく、実質的な植民地支配は現在のトーゴの南部地方に限定されていて、ソコデ以北の北部諸族にドイツ植民地当局の行政が及ぶことはほとんどなかったのである。

このようにドイツ軍のトーゴ平定作戦が一時的にせよ頓挫したのは、まず第1に、河辺民コンコンバ族の場合、オチ川とその流域湿原が騎馬隊の攻撃し難い防壁になっていた。また、山地民カブレ、ランバ、ナウデンバ (Naudemba)、タンベルマ (Tamberma) 等の諸族の場合、険阻なアタコラ山脈が難攻不落の要塞のように騎馬隊の侵入を妨げていた。こうした環境的要因が強く作用してドイツ軍は有利に戦闘を展開できなかったからである。

第2に、山地民はカブレ族に典型的に見られるように、男子が出生すると幼児期から山中に集合させ、スパルタ式教育を施し、質実剛健な気風をうえつけ、戦士として養成していた¹⁾。このカブレ族のような伝統的気質がドイツ軍の侵入にたいして何事にも恐れない旺盛な闘争心となって現われてドイツ軍に対する戦闘にもそれが遺憾なく発揮されたのである。

そして第3に、鉄器と戦争との関係を看過するわけにはいかない。すでに述べたように、山地民などは軍事技術としては諸王国などとは異なり、騎馬も鉄砲もなく、ドイツ軍の近代兵力に対抗するすべはなかった。しかし、付近に鉄生産地をもち、鉄鍛冶技術を発達させて、多数の毒矢、刀剣、戦斧などの鉄製武器を所持していた。これらの鉄製武器はかなり精錬された鉄から製作されており、硬度と強靱さにおいて充分戦闘に使用できる刃物であった。山地民がドイツ軍の侵入にたいしてかなりな抵抗を示していたのは、自然の要害という環境的要因と勇敢な闘争心に加えて、こうした鉄製武器の供給があったからである。

西アフリカのギニア湾岸に沿った南部地方では、19世紀までに鉄生産はほとんど消滅してしまった。しかし、カメルーンやトーゴの北部地方では20世紀に入ってもローカルな鉄生産が存続しており、溶鉱、精錬などの鉄工技術は北部諸族の最も重要な文化表徴の一つであったのである。言いかえると、武器生産に必要な鋼鉄はローカルな精錬技術でけっこう生産されていたのであり、ヨーロッパからの購入品に依存する必要がなかった。西アフリカでは比較的早い時期から鋼鉄を生産する技術が発達したのであり、ドイツ軍のトーゴ北部平定作戦が予測せぬ抵抗に遭遇したのも山地民による鋼鉄製の武器の使用があったからにまちがいないように思われる。

1) ちなみにドイツ政府は、後にカブレ族のこうした勇敢な性格を利用して、警察官に採用する方針を採り、フランス政府もまた、第2次世界大戦の兵力増強にあたり、カブレ族から隊員を募集し、アルジェリアやインドネシアへ派遣した。

しかしながら、西アフリカの製鉄と鍛冶の盛衰をみると、トーゴのように20世紀初頭まで生産が存続していた地方もあれば、ギニアのフータ・ジャロン (Foute Djallon) のように、18世紀には鉄生産を中止したところもある。

問題はなぜこのような地域差や時間差が発生したのか、また、今世紀に入っても、北部トーゴではローカルな鉄生産が存続したのはなぜか。そして、トーゴ北部の鉄文化の技術体系はどのように展開したのか、こうした諸問題を民族学的に明らかにするのが本稿の目的である。

2. 鉄生産の歴史

1) 鉄生産の発達過程

まず、北部トーゴの鉄生産はいつごろ始まったのか。バロスによると、トーゴ山地のバッサリ地方の鉄生産は14世紀初頭にまでさかのぼるといふ。バンジェリービチャベ (Bandjeri-Bitchabe) およびカブーバッサリ (Kabu-Bassari) の二大鉄鉱脈の主軸線に沿った各地方から大小合わせて152か所の溶鉱炉跡が発見されており [BARROS 1986]、廃棄されている鉱滓のマウンドと燃え木などから各高炉所在地における鉄の産出量と年代測定を行なうと、次のような推定値が得られた。すなわち、

第1期	—AD1300/1350年まで	
	?	t
第2期	AD 1300/1350—1550/1600年まで	
	7	~20 t
第3期	AD 1550/1600— ca. 1800年まで	ガーナ北部に諸王国勃興
	28	~81 t
第4期	ca. AD 1800— 1925年まで	ドイツ軍の内陸侵攻
	42	~98 t

である。この結果から、年代が新しくなるほどより多量の鉄が生産されたことが確認される。17~18世紀にかけて鉄生産が倍増したのは西隣りのガーナ北部に成立したダゴンバ、マンプリシ、ゴンジャなどの諸王国の間に緊急な武器の需要が高まったからであり、ナイジェリア北部からコーラを求めてサバンナを横切り、ガーナ南部へ向かうハウサ商人の長距離交易路がバッサリ地区を通過して鉄生産を刺激したからである。その後、18世紀後半から鉄の生産量はうなぎ登りに上昇し、ドイツ植民地支配

が確立した、19世紀末から20世紀初頭にかけての十数年間、鉄の生産量は最高に達していたのである。

こうして、ドイツの内陸侵攻から第1次世界大戦終了までの間、鉄の需要が著しく高まったのは、1) 強力な軍隊をもつアシャンティ王国やダホメ王国などが軍事目的で多くの鉄を輸入し始めたこと、2) 山地民などが来襲する奴隷狩りを迎え撃つため、鉄製武器を盛んに造り出したこと、3) 第1次世界大戦中、ドイツ領植民地ではヨーロッパ産の鉄の輸入が困難になったことなど、の諸理由によると考えられる。結局、バンジェリとバッサリ（バッサリ郡のなかのバッサリ地区）では、1925年まで伝統的な方法により鉄生産が行なわれていたのである。それは、言いかえると、急上昇した鉄生産が頂点に達し、最後に打ち上げ花火のように一瞬に消えたことを意味している。1919年、トーゴランドはドイツの敗北により東西に分割され、22年、イギリスが占領した西側がゴールド・コーストの一行政区に編入、3分の2を占める東側の地域がトーゴ領として残り、フランスの統治委任領になった。戦争終結によりトーゴにも自由にヨーロッパ産の鉄が輸入されるようになり、バッサリ産の鉄の需要が減り、土製高炉は放棄され、かえりみられなくなったのである。

2) 鉄生産の衰退理由

ところが、歴史家は西アフリカの鉄生産が1800年までに消滅したという見方に立っている [FLING 1976]。たしかに、大航海時代以後、ギニア湾岸地方に、ヨーロッパ産の鉄が輸入されてローカルな鉄生産が減少の一途をたどったことは事実である。だが、トーゴやカメルーンの北部地方では、むしろ19世紀になって鉄生産量が増加したように、ヨーロッパからの鉄の輸入があってもローカルな鉄生産が消滅しなかった地方もある。したがって、歴史の見解として一般化している鉄生産衰退の理由にも訂正の必要がある。すなわち、フリントは、アフリカが鉄生産を放棄したのは、ヨーロッパから輸入された安価で、純粋な鉄棒がローカルな鉄の競争力を奪い、アフリカ産の鉄を駆逐していったからだとして述べており [FLINT 1976]、また、P. ボハナンも輸入された鉄やスチールが時間、作業そして金銭面からみて安上がりだったのでアフリカの鉄が消滅したとアフリカ概説のなかで書いている [BOHANNAN 1964]。

しかし、本当にヨーロッパから輸入された鉄がアフリカの製鉄業を衰退させる決定的な要因になったのであろうか。まず重大な誤りはヨーロッパの鉄が安かったと信じられていることである。C. L. グッチャーによると、輸入された鉄は決して安い価格で入手できたわけではなく、アフリカの鍛冶師たちによって再利用されることは少な

かったという。そのうえ、18世紀以降輸入されたヨーロッパ産の鉄は純度が低く、多量のイオウ分を含んでいたという [GOUGHER 1981: 179]。考古学者もまたヨーロッパ産の鉄が粗悪であり、土製高炉で生産されたアフリカの純粋なブルームや炭素鋼の方が輸入品よりも良質であったことを証言している [FAGG 1952; SASSOON 1964]。したがって、安くて質のよいヨーロッパ産の鉄の輸入によってアフリカの鉄工業が衰退したという歴史家の見解は誤りである。グッヒャーによると、アフリカの鉄生産が衰退したのは、溶鉄に必要な木炭を作る森林資源が枯渇したことが決定的であったという。木炭に適したアフリカの木材の種類は、まめ科の *Burkea africana*, *Acacia* sp., まめ科ミモサ属の *Prosopis africana*, クロウメモドキ科の *Zisypheus mucronata* などといわれている [GOUGHER 1981: 181]。アフリカ各地の鉄生産地では高炉に必要な燃料を求めて森林の伐採がどんどん進行していったのである。

だが、これらの樹種は成長が遅く、*Burkea africana* などは約20年以上の時間を経過しなければ薪炭に利用できない。ちなみに、ガーナ中西部、ダパー (Dapaa) の高炉遺跡に廃棄されている鉄滓の量と重さを試算したグッヒャーによると、この地方では1400年から1700年までの300年間に30万7431本の立木が消費されたと推測されている。現在、同地方は完全にサバンナに遷移しており、生態学的に見ると、新しい人工サバンナが出現したことになった。

このようにして、大量の森林消費は急速に植生を改変する。かつて鉄生産センターが存在した地域はどこでもサバンナ化が著しく、高炉遺跡があったダパーの背後地は今や完全に森林からサバンナに変わっている。こうした、17世紀から18世紀にかけて西アフリカに出現した比較的新しいサバンナを生態学者は「派生サバンナ」(derived savanna) と呼んでおり²⁾、そこに鉄生産のための森林伐採が深く関与していたと見ている [AHN 1970]。ドーゴのバッサリ地方で製鉄業が20世紀初頭まで存続していたのは、鉄鉱石が豊富に埋蔵していたことと、薪炭を生産できる山地林がまだかなり残っていたからだと思われる。

3. 鉄生産地と土製高炉

ところでトーゴ北部ではバッサリ地方が鉄生産センターであったが、地理的に隣接するガーナやベニンにもいくつかの鉄生産地があった。フランス=ベフによるとバ

2) 最近こうした「派生サバンナ」は農業開発によって方々に出現している。



図1 アタコラ山地の土製高炉
[FRANCIS-BOEUF 1937] より

ッサリ山地と地質学的に連続しているアタコラ山脈のベニン側にもタンベルマ族と同系のソンバ (Somba) 族が鉄生産に従事しており、高さ 3.5 メートルの土製高炉が紹介されている [FRANCIS-BOEUF 1937: 421-423]。トーゴ北部のバンジェリの高炉は原料を運びあげるために一本の足掛かりのついた丸太をたて掛けていただけであるが、アタコラの製鉄地では高炉の周りに先端が二又になった 4 本の支柱が建てられ、櫓が組まれていた。職人たちが櫓のうえに上って、高炉に原料などを投入できるように梯子がかけられており、バンジェリよりも大きな規模の土製高炉が存立していた。また同じベニン北部のアタコラ山脈のカソ・カノ (Kasso-Kano) には高さ 2.5 メートルのディアポロ型の高炉があったという報告されている [POLE 1985: 151]。さらに南東ガーナ、ボルタ州の丘陵地アクパフゥ (Akpafu) にも性能のよい高炉があり³⁾、鉄鉱石の埋蔵量こそ少なかったが、バンジェリ最盛期と同じ頃まで鉄を生産していた [POLE 1985: 150, 504]。

これらの地域の鉄生産量もローカルな需要を満たす意味ではさうとう量に達していたと思われるが、バンジェリ地区の鉄生産量にはとうてい及ばなかった。フォン・ルシアンによると、今世紀初頭、実際に鉄生産設備として機能していたかどうかは別にして、バンジェリ地区の高炉は総計 490 も数えられたのであり [LUSCHAN 1909]、圧倒的な鉄生産規模であったことが推定されるのである。筆者がバンジェリを訪問したのは 1981 年であり、もはや鉄生産センターの面影はなく、広場に一棟の高炉だけが

3) アクパフゥのほか北西ガーナのラウア (Lawra)、ティザ (Tiza)、チャナ (Chiana) の村でも鉄生産が行われていた。

保存されていた。年に数回、鉄生産のデモンストレーションが行われており、伝統的な鉄生産過程を観察することは可能である。筆者の場合も現存する鉄工職人に集ってもらい、全費用を負担して製鉄作業を実演してもらった⁴⁾。

原料となる鉄鉱石はバンジュリ背後の山から採取される。山道を行くと、山腹に採掘現場があり、数メートルの深さに掘ったトレンチや堅穴がみられる。鉱脈が豊富に露出しているため地下壕を作って坑内採掘をする必要はなかった [和田 1987b]。高炉は円筒型で、高さ約2.5メートル、シャフトの外径約110センチ、内径約70センチ、厚さが約20センチで、やや末広がりな構築されている。約3.5メートルあるバッサリやアタコラの高炉と比較すると、高さが約1メートル低く、容積が小さいが、大きな高炉と同量のブルームを採取できるという。鉄工職人の談話によると、高炉の高さは鉱石の質で決まるという。バンジュリ産の鉄鉱石はそれだけ良質であったということである。言いかえると、バンジュリではバッサリよりも少ない鉄鉱石で同じ大きさのブルームを生産していたのである。良質な鉱石を必要とするので、女性たちは山積みされた鉱石を選別し、不純物をとりのぞく作業に従事していた。投入する鉄鉱石に相当して必要な木炭も女性たちによって準備された。

溶鉱は男たちの仕事である。高炉に木炭と鉱石と交互に何層にも積み重ねて投入する。火は基部から燃え出し、煙が立ち込める。基部の円筒壁には等間隔に7つの通風孔が開けられている。バンジュリではふいごは用いない。鉄鉱石から鉄を取り出すためには約1540度の高温が必要である。それより温度が低くなると還元が不十分であり純鉄は採取できない。デモンストレーションでは、かろうじて鉱石から鉄を分離させることのできる温度にあげて、約4時間後、基部正面のアーチ型の開口部から取り出されたのはソフトボール

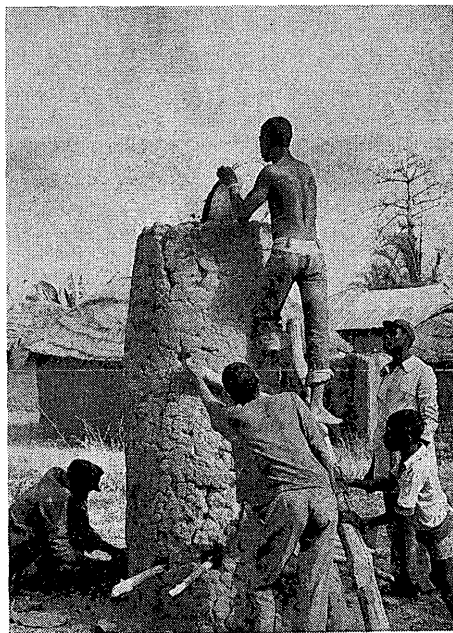


写真1 バンジュリの土製高炉

4) 本格的な溶鉱は炭と鉱石を積み重ねて高炉をいっぱいにするが、デモンストレーションでは一層だけであった。

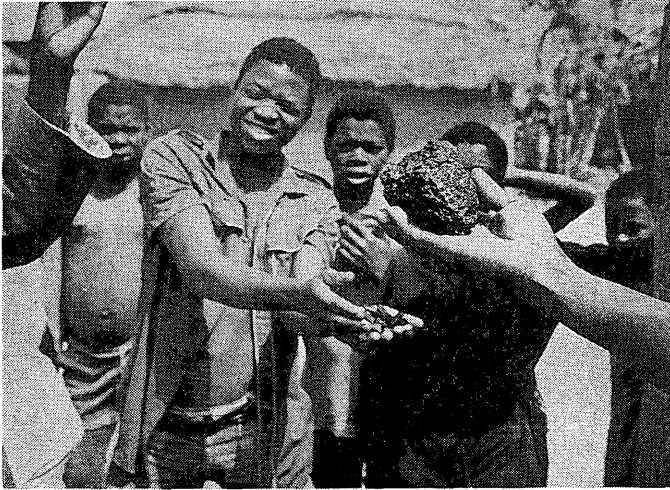


写真2 バンジェリで製造された鋤鉄

大のブルームであった。しかし、ほんとうの溶鋳作業は3日間かけて行ない、最後にブルームが高炉の底に音を立てて落ちたという [POLE 1985: 150]。鉄生産が盛んであった頃、各高炉から25から30キロの重さのブルームが生産され、そのうち鉄として使用できる量は約20キロだったと推定される。以上、西アフリカではバッサリ地方で生産された鉄から様々な鉄製品が製作されていった。アフリカ民族技術は鉄工面からも再検討が必要とされているのである。

4. 鉄製品の種類と用途

1) 発火具

アフリカの発火法の民族誌諸資料を整理したラーゲルクラントによると、西アフリカでは「キリモミ式」よりも「火花式」の発火法の方がより多くの分布を示している [LARGERCRANTS 1954]。言うまでもないが、「キリモミ式」とは、発火錐を両手で回転させ下に置いた台木（火切り臼）を摩擦し、穴ぐりに生じたボクチに火をつける方法であり、火花式は、火打金に火打石（フリント）を打ちつけて火花を出しほくちに移す発火法である。

これら二つの発火法を比較すると、前者がサハラ以南ならあまり苦勞せずに入手できる乾燥した一本の火起し棒と一片の木板を発火具として用いるのに対して、後者は産地が特定している特殊なフリントと加工された鋼とを組み合わせた発火具であり、

時代的に新しく、使用範囲も限定されている。もちろん、火打石も石器時代から使用されていた古い発火具であるが、単に石と石との打撃では発火が難しく、むしろ火打石と鉄（火打金）との組み合わせになってから重要な発火具として普及したと考えられ、西アフリカの発火法が「キリモミ式」から「火花式」へ移行していく過程は、この地方の鉄生産の発展と密接な関係がある。すなわち「火花式」の場合、柔らかい鉄ではあまり効率的な発火具にならない。鉄を火打金として使用するには鋼鉄に精錬する必要がある。火打石は硬い鋼鉄との衝撃によって高熱の火花を出すからである。西アフリカでは、紀元前3世紀頃、ニジェール河畔ですでに鉄生産が始まっていたといわれているが、鋼鉄が生産されていたかどうかについてはまだ十分な研究が行なわれていない。

しかし、最近、P. R. シュミットらの考古学調査によると、古代アフリカの製鉄法でも鋼と考えられるほど十分な炭素を含有した鉄が生産されていた可能性があり、土製高炉の熔融過程だけでも高い浸炭（カーバライゼーション）効果をあげて、良質な鉄を精錬していたと考えられるのである [KENSE 1985]。14世紀以降、ビチャンベ族（バッサリ族の1クラン）によって溶鋳技術が導入された北部トーゴでは、各高炉から約50から60パーセントの純鉄を含むブルームが生産されていたと推定されているが、このブルームの鉄質純度を高めるため、粉碎した後、不純物を取り除き、鍛冶師によってもう一度精錬作業が行なわれたという⁵⁾ [BARROS 1986]。このように西アフリカの製鉄地では鋼に近い良質の鉄が生産されていたので火打金を製作することは比較的容易だったと考えられる。

しかし、ラーゲルクラントは、西アフリカで使用されていた鋼鉄製の火打金は大航海時代以降の輸入品とする見方にたっている。たとえば、アシャンティ王国の南部アクラ海岸地方で使用されていた鋼とフリントは、ヨーロッパから導入されたものであり、またトーゴ海岸部に住んでいるエウェ族の間で重宝されていた発火用鋼鉄も、15世紀末、アネホ（Aneho）に来航したポルトガル人によって使用法が教えられたと述べている [LARGERCRANTS 1954: 44]。ついで、アネホの東側のベニン海岸の貿易港ウィダー（Whydah）や背後に続く内陸の王都アボメ（Abomey）の住民の発火具となっていた鋼鉄もヨーロッパ産であり、トーゴ海岸部から約150キロ内陸に入ったアタクパメ（Atakpame）及びその背後の山岳地方に分布するアクポソ（Akposso）、アケブ（Akebou）、アデレ（Adere）などのトーゴ南部諸族に見られた火づくりの鋼鉄

5) 原理的には炭素の含有量を1.7%以下にすれば鉄は鋼に変わっていく。技術的には銑鉄中の炭素を燃やして除去すれば銑鉄は可鍛鉄の鋼に変わるものである。

も交易を通して海岸部から伝えられたと解釈されている。さらに、トーゴやガーナの北部地方そしてブルキナ・ファソに広がるボルタ系諸族のコンコンバ、ダゴンバ、カッセーナ (Kassena)、ナンカンセ (Nankanse) などの諸族が使用している鋼鉄もヨーロッパ製品と見なされている。

15世紀以降、貿易を通してヨーロッパ産の鋼鉄がアフリカ海岸部にかなり持ち込まれたことは否定できないが、しかし、当時、アフリカ人が使用していた鋼鉄がすべて輸入品であるという見方には賛成できない。アフリカの土製高炉でも火打金になりうる硬い鉄が生産されていたことはすでに述べたとおりである。むしろ輸入鉄よりも品質が良かったという調査報告さえある。たとえば W. フェグによると、アフリカで産出された鉄は、輸入されたヨーロッパの鉄よりも硬質であり [FAGG 1952]、スチールと呼びうる鉄であったと推定される。また、サッソンも、ヨーロッパ産の鉄で製作された道具類は品質がよくなく、ナイジェリア人は伝統的な鉄生産を再開したと報告している [SASSOON 1964]。したがって、アフリカ製の火打金があっても決して不思議ではない。

ただ、問題として残るのは火打金の形態である。フレリッヒの調査によると、トーゴ北部のコンコンバ族は発火具として馬蹄形のスチールを使用していた(図2)。馬蹄形は、騎馬に蹄鉄の使用がなかった西アフリカでは伝統的な火打金の一般的な形態とは考えられない。この形態の火打金、ラーゲルクラントが指摘するとおり、ヨーロッパからの輸入品と考えられる。発火を目的とするスチールならもっと単純な形態、たとえば、長方形や楕円形の平たいスチールで十分である。わざわざ馬蹄形の火打金を製作する理由はアフリカでは見つからない。また火打金のかわりにナイフ、腕輪、斧などを使っても発火させることができる。このように、馬蹄形の火打金はヨーロッパ製であった可能性があるが——後に馬蹄形は模倣されたのかも知れない——普及していた火打金はローカルに製作されていたと考えるほうが自然である。このようにトーゴ北部ではアタコラ山脈からフリントの材料になる硬質な石、石英、水晶などが豊富に産出され、それにバッサリ産の精錬された鉄を組み合わせると有効な発火具になり、簡単に火をつくることのできたと考えられる。

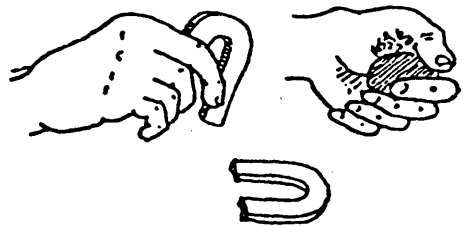


図2 コンコンバ族の火打金 [FROELICH 1954] より

2) 武器類

さて、バッサリ地方の鉄生産量が上

昇の一途をたどったのは北部諸族の間に戦闘のための鉄需要が高まったからであり、武器として鉄、刀剣、槍、戦斧などが製作されたことはすでに述べたとおりである。そこで、次に、これらの武器についてタンベルマ族から得た諸資料をもとに技術誌的な記述を行ないたい。

i) 弓と矢

まず、弓矢は北部諸族のうち、とくに、アタコラ産地に居住するパレオニグリティック山地民にとって最も重要な武器であり、全工程が男子によって製作される。まず、弓の材料は川辺林から採取される。弓に最適な小灌木のある場所へ出かけていった男は枝木を

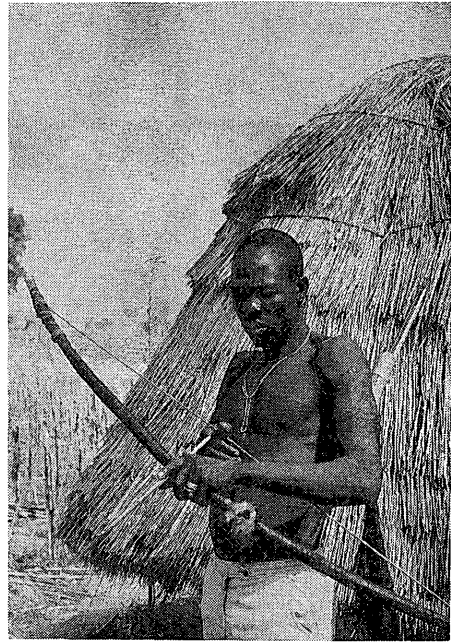


写真3 単弓と矢

伐採し、家に持ち帰り、それを文字通り弓なりに曲げて陰干しする。次に弦は牛の腱や羚羊 (Cephalolophe) の首筋からとった皮片をよりあわせて一本の紐に作られる。その際、表皮の毛はきれいに掻き削られる。湾曲した木に弦を張ると弓は完成する。最後にアクセサリーとして美的ないし呪的な目的で蛇やかげの皮を弓幹の中央部に巻いたり、家禽の羽毛をつけたりすることが多い。このようにタンベルマ族の弓は弓幹部が単一の材料で作られた単弓である(写真3)。

矢は柄が非常に硬い特殊な禾本科植物から製作される。まだ青々とした若木を適当な長さに切り(約 50 cm)、必要な本数が集まると家に持ち帰り、一本ずつ炎のうえにかざし、少し焼きを入れる。次に乾燥するのを待ってまっすぐなものを選び、その先端に穴を開ける。そこに糊を入れて鉄を差し込む。はずれないように薄い、しなやかな植物繊維をぐるぐると巻いて頭部は完成する。尾部は片面を少し削り取り、薄い樹皮の帯紐を巻き、最尾部に弦が入る小さなきざみ目を入れる。矢羽はつけない。

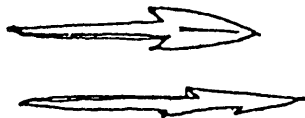


図3 鉄身

鉄はすべて鍛冶師から入手する。狩猟には一般に逆刺のついた鋭い鉄身が使用されているが、注文によって葉状の鉄身も製作されている(図3)。すべての鉄に

は念入りに毒が塗りつけられる。毒はキョウチクトウ科キンリュウカ属 (*strophantus*) の種子から抽出され、乾燥した後、粉末にした蛇の頭部、さそり、唐辛子などを混合し、煮詰めて特殊な容器に保存される。

弓矢はえびらとワンセットになっており、常時7、8本の矢が収められている。昔は戦闘用に50本ほど入る大きなえびらが作られたという。えびらの筒は竹から作られていて、両端部に蛇皮が巻かれて補強してあり、それは同時に呪符になっている。また中央部には羚羊の皮が巻きつけられており、肩にかける紐がしっかりと結んである。

ii) 槍

タンベルマ族の槍は穂先も柄部もすべて鉄製である。全長約1.5メートル相当な重量があり(約5~6キロ)、狩猟用に使用されることはなく、また、武器としても効率が悪く、ほとんど重要性を持っていない。むしろ、象徴的な意味が大きく、儀礼用具であり、成人式や悪霊払い、葬礼などの場合に使用される。槍先が大きく両側に複数の返りがついているのが特徴である(図4)。儀礼の際には、そこに派手な布が巻かれる。言いかえると、鉄一つを単一材料にしながら完成した形態を持っているのがタンベルマ族の槍であり、この種のものは他に類例が少なく、明らかに豊富な鉄と精錬技術を背景に作られたものである。事実、この鉄製槍の製作地はアタコラ山系ベニン北部であり、ソンバ族(タンベルマ族と同一祖先)の鉄鍛冶職人によって製作されたと考えられる。

すでに述べたように、ソンバ族はアタコラ山脈の内奥に居住していた関係で、19世紀まで土製高炉を操業させていたのであり、その結果、ぜいたくに鉄を使用して鉄製品を作ることが可能だったのである。しかしながら、鉄はきわめて高価であり、タンベルマ族の間でもこの槍の所有者の数は限定されている。古老の話によると、槍は伝統的に土地祭司によって保持されてきたのであり、諸儀礼の際に貸し出されてきたという。

iii) 刀剣類

ところで、パレオニグリティック山地民の優秀な精錬技術を示す鉄製品に刀剣類がある。刀剣類には長刀と短刀の二種類があり、いずれも鋼鉄製で、鋭利な刃をもち、武器として十分な実用性を備え



図4 鉄製槍

ている。おそらく、焼き入れ、焼き戻しを繰り返して、硬度を加えて表面を鋼鉄に変えたと思われる。

まず、長刀は、カブレ族ではほぼ直刀の形態をとっているが、タンベルマ族やランバ族では反りがあり、全長51センチ、刀身40センチほどの片刃で、騎馬隊が所持する刀剣に類似したサーベル状になっている(図5, 6, 7)。また小手を保護する取っ手が環形になっており、イスラム文化の影響がみられる。すなわち、こうした武器はパレオニグリティック山地民が本来所有していたと考えられず、おそらく、イスラム文化の影響を受けて製作を始めたように思われる。すなわちイスラム諸王国との接触を避けていた山地民も、奴隸狩を目的に侵入してくる騎馬隊との肉弾戦に対抗して長刀をもつことが必要になっていたのであろう。カブレ族では戦闘目的の年齢集団コンドナ (*Kondona*) が長刀を所有し、タンベルマ族やランバ族でもイニシエーションを終えた若い戦闘員がこれを管理していた。このように、長刀はパレオニグリティック山地民にとって比較的新しい武器と推定され、H. バウマンによっても、ネオ・スーダン文化に位置付けられている [BAUMANN 1964]。

こうした長刀にたいして、短刀は弓矢と並んでパレオニグリティック山地民にとって最も古い武器の一つと考えられる。タンベルマ族は現在でも、男子の必需品として短刀を所持し、遠出の際にはかならず首あるいは肩にかけて携行する(図8)。全長27センチ、刀身20センチほどの長刀で、牛のなめし皮で作った専用の鞘におさめられている。長刀が主として武器として製作されたのに対し、短刀は生活全般に用途が広がっており、

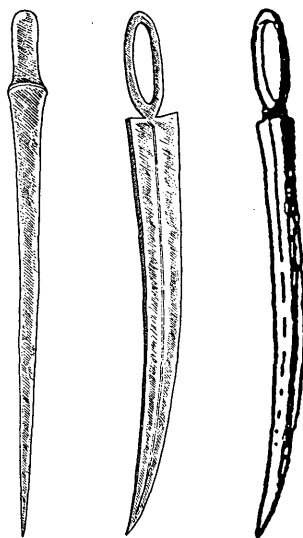


図5 図6 図7

- 図5 カブレ族の長刀、直刀の形態に注目
- 図6 タンベルマ族の長刀、反りがあり、取っ手が環形になっている
- 図7 ランバ族の長刀 [BAUMANN 1964] より

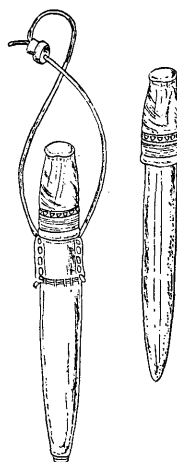


図8 小刀、首からかける

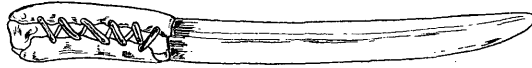


図9 山 刀

日常的用具として現在でも盛んに製作されている。すなわち、家禽や家畜の供儀、解体、料理などは男子の仕事であり、短刀は料理刀としてもなくてはならない必需品である。

また、通常は伐採用刃物に分類されているが、充分武器として使えるものに山刀がある。形態は全長約50センチ、そのうち柄15センチ、刀身約35センチで、伐採を主目的にするため幅が広く刃先も鈍く丸みを帯びている(図9)。山刀は今ではほぼアフリカ全域に普及しているが、東アフリカではスワヒリ語で「パンガ」(panga)、西アフリカではフランス語を用いて「クッペ・クッペ」(coupe-coupe)と呼ばれているように、アフリカ起源の刃物ではない。おそらく、植民地時代、ヨーロッパから輸入された刃物であり、用途が広く、伐採のほか家屋の建築、食肉の処理や解体などにも使用され、サバンナの必需品になったと思われる。タンベルマ族は現在、この種の刃物をローカル市場で購入している。製作者はおそらくカブレ族の鍛冶屋であり、その仲間の皮革職人の手で柄付けが行なわれたと推定される。

iv) 矛槍, 戦斧等

北部トーゴには、そのほか、槍とまさかりを一つにしたような武器の矛槍がある。

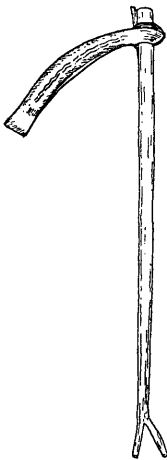


図10 矛 槍



図11 タンベルマ族の戦斧
[BAUMANN 1964]より

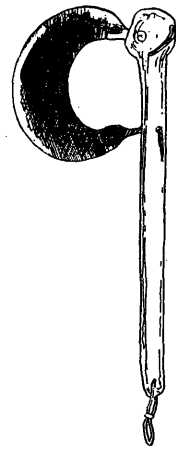


図12 カブレ族の戦斧

タンベルマ族が所有しているものは、柄が80センチ、弓なりに曲がった矛の長さが28センチで、戦士は左肩に引っ掛けて歩く(図10)。コンコンバ族にもほぼ同形の矛槍があり[FROELICH 1954: 173]、この種の武器は騎馬隊に対抗するためアタコラ山系からオチ河流域平原に広がったものと思われる。

また、H. バウマンはタンベルマ族の戦斧を紹介している [BAUMANN 1964: 72]。戦斧もトーゴ北部の山地民に発達した重要な武器の一つで、各地方のカブレ族の鍛冶師によって製作



写真4 かぎつきコン棒

され、その付近の諸族にも輸出された。形態は、通常のままかきりのように鉄刃のふくらんだ銅部の孔に、柄を通したものでなく、柄の両端を鋭く尖らし、こん棒に突っ込んだまさかり形の山刀といったものである。そして刀の形によって二種類あり、長方形の刃はタンベルマ族、半月形の刃はカブレ族の戦斧である(図11, 12)。

さらに古典的な鉄製武器として、こん棒の先端に太い鉄製円環をはめ込んだ投げ棒がある。全長約70センチ、戦闘用というよりむしろ狩猟用具として使用されており、主として地上を疾走する小動物や家禽類の捕獲に用いられている(図13)。その他、先端につの字型の鉄具をはめた武器も狩猟用に使用されている。こん棒よりも軽く、ひっきりがあるので多目的に利用できる(写真4)。以上、こうした矛槍、闘斧、闘斧、そして鉄輪をはめた投げ棒などは明らかにネオ・スーダン文化の流れに属するものである。



図13 こん棒

3) 農具類

さて、バッサリ産の鉄は武器類のほかに鉄製農具をつくる原料として非常に重要であり、カブレ族を筆頭にいくつかの山地民はバッサリ地方から粗鉄を使って良質な農具を製作していた[和田 1989b: 612]。農具の主体は手鍛であり、形態的にはスーダン地方で使用されていた「ダバ」(*daba*)と同系な特徴を示している。

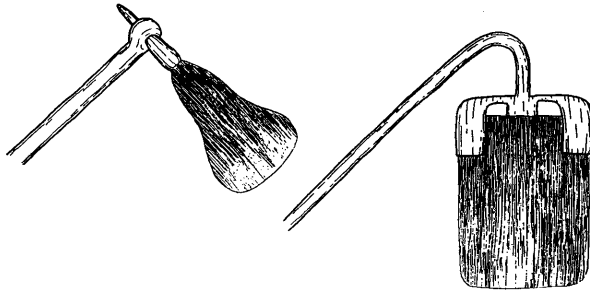
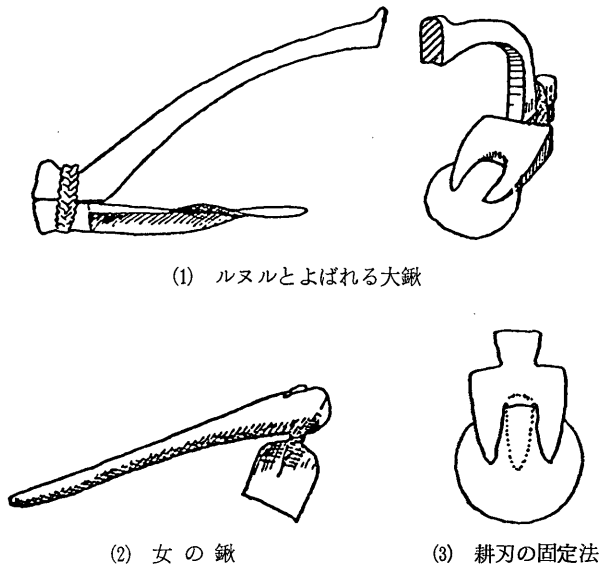


図14 スーダン地方で使用されている手鋤ダバ [FRANCIS-BOEUF 1937] より

一般には、ダバは、耕刃の大きさにより「大きなダバ」と「小さなダバ」に分類される。フランシス・ベフによると「大きなダバ」はたんに耕刃が大きいだけでなく、柄の先を三叉に分け、耕刃を差し込んで固定してあるのに対し、「小さなダバ」は小さいだけでなく、耕刃の頭部を尖らせて柄に差し込んで固定しており、柄と刃の接合状態に関する両者の構造上の相違も明確に描画（図14）されている [FRANCIS-BOEUF 1937]。

北部トーゴでも鋤の一般分類は、耕刃の大小を基準にして行なわれ、コンコンバ族のように「小さな鋤」が女の鋤、「大きな鋤」がルヌル (*lenul*) と呼ばれ、区別されているが (図15) [FROELICH 1968: 41]、実際には、柄の長さや形態 (直材、曲材)、



(1) ルヌルとよばれる大鋤

(2) 女の鋤

(3) 耕刃の固定法

図15 コンコンバ族の鋤 [FROELICH 1954] より

柄と耕刃の種類（長方形、円形、ハート型）、柄との固定法など、様々な相違を含んでおり、適宜に使い分けがなされている。耕刃の柄を根棒上に差し込んだ「小さなダバ」のカテゴリーのなかにも大型のものがあり、また耕刃と柄の固定法に筒状の耕刃にへの字形の柄を差し込むソケット式もあるなど、多くのバリエーションがみられる。

すなわち、ふつうフレイリッヒのようにカブレ族の鋤としてハート型が図示されているが（図16）[FROELICH 1968: 170]、フェルディエによるとカブレ族には1）ハクペンク（*hakupenku*）：地面を区画する溝を掘るための大型の鋤、2）ハクキマーン（*hakukimaanau*）：ハクペンクと同じ形で小型の鋤、3）ハクキュビエ（*hakucubiye*）：井戸や墓などを掘るための鋤、4）ドゥーナ（*duuna*）：蒔種のための鋤、5）ニトゥ・ハク（*nituhaku*）：除草のための鋤、などの5種類の鋤があり、使い分けられているという [VERDIER 1982: 193]。同じ山地民でもタンベルマ族はカブレ族ほど集約農業が発達していないので鋤の種類も多くない。主要耕具はハート型の鋤で「リカン」（*rikan*）という。「リカン」はへの字形の柄に尖らせた耕刃の先を差し込んで、鉄輪で締め、固定してある（図17）。また、補助耕具として「タピェタ」（*tapyata*）と呼ばれる穴掘具がある。前者とは形態が異なり、筒状の耕刃にへの字形の柄を差し込むソケット式で固定されている（図18）。鋤類のうち、大型の耕刃はほとんどカブレ

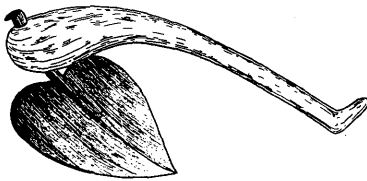


図16 カブレ族のハート型鋤
[FROELICH 1968] より

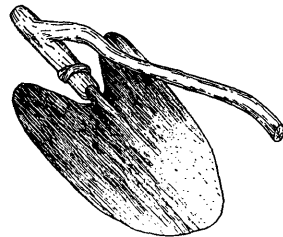


図17 タンベルマ族の鋤

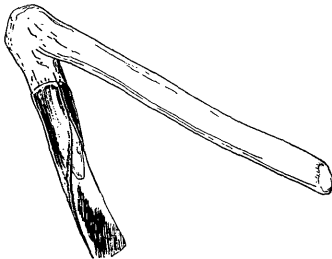


図18 穴掘具

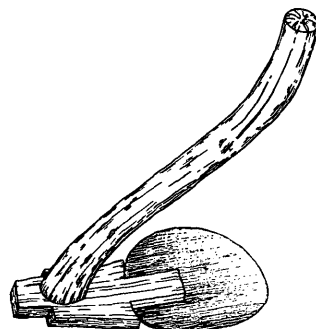


図19 ランバ族の鋤

族から輸入している。地元の鍛冶屋は鋤を製作することはない⁶⁾。それはタンベルマ族とソンバ族との間の鍛冶屋の伝統の違いであり、後に詳しく検討する。

また、ランバ族の主要耕具は丸型の耕刃を三刃に分かれた刃床部（日本鋤の風呂にあたる部分）に差し込んだ、いわゆる「大きなダバ」であり（図19）、同時にタンベルマ族と同じようなソケット式の穴掘具も併用されている。川田氏によると丸型の耕刃は「刃が薄くて軽く、しかも一か所がすり減れば他の部分へまわして使える利点がある」という【川田 1979: 133-137】。ランバ族の鍛冶屋も職業的クランを形成していないが専門職としてなかば独立しており、タンベルマ族にも製品を輸出している。こうした鍛冶師たちは、現在では、ヨーロッパ型の農具を生産しており、北部トーゴで使用されている鎌は（図20, 21）、そうした専門的な鍛冶師たちによって製作されたものと考えられる。ここで承知しておかなければならないことは、鋤にはそれ自体価値があり、代替貨幣として使用されていたことである⁷⁾。それ故大きな鋤は財産であり、現在も耕刃がそのまま所持されている場合が多い。タンベルマ族では葬送儀礼を執行する際、死者の葬儀品と一緒に耕刃や鋤が家の壁面に並べられる。この時、鋤は単なる農具ではなく、儀礼具である。トーゴ北部では実用目的を越えて鉄製品が製作されているのである。

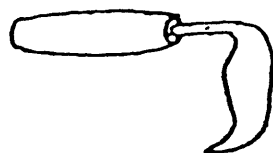


図20 コンコンバ族の伝統的な鎌 [FROELICH 1953] より)

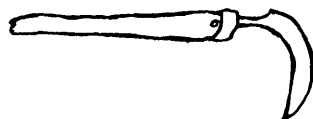


図21 タンベルマ族の現代の鎌

4) 装身具類

さて、鉄はとうぜん装身具の材料になる。タンベルマ族で最も注目される独特な形態をもつ装身具の一つに踝飾りがある（図22）。長い2本の細幅の鉄板をより合わせた卵形の環を作り、その中にまた4本の輪を通してある。イニシエーション諸儀礼の際に、少女たちが踝飾りを足首にはめて歩くと「カジャ、カジャ」と賑やかな音を出す。同様に、少年が大腿部に巻きつける鉄製装身具にも音を出すものがある。細工としては、笹の葉状の平たい鉄片を縦に折り曲げて両端に輪を作り、その両端の二つの

6) タンベルマ族は、おもに雑穀を栽培する農耕民であるが、伝統的な手鋤は木、貝殻、樹皮で製作されていた。5章で詳述するように鍛冶師は存在したが、耕刃は製作しなかったからで、かなりの価格でカブレ族などから購入されていたのである。

7) 考古学的発見によるとアジャンティ王国ではオマンヘネ (Omanhene) の治世、首都ジュアベン (Juaben) で、ンナーボ (nnabo) と呼ばれる小さな鉄の円盤が貨幣として使用されていたという [WILD 1936]。故に、トーゴ、ガーナ方面では鉄貨も存在していた可能性がある。

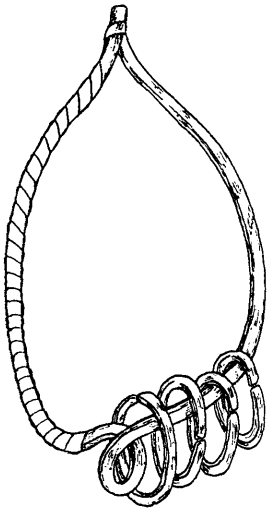


図22 踝飾り

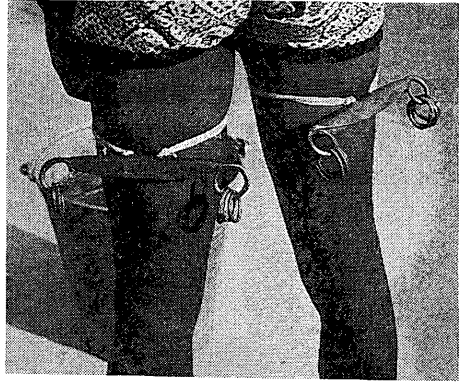


写真5 タンベルマ族の飾り音具



図23 コンコンバ族の飾り音具
[FROELICH 1954]より

輪にそれぞれまた3本の輪を通し、ガラガラのように音が出るように釣り下げている。こうした鉄を細工した音の出る鉄製装身具はいずれもダンスにあたって装着され、同時に音具 (sound instrument) として使用されている(写真5)。フレリッヒはタンベルマ族のものとはほぼ同じ形態の飾り音具をコンコンバ族の鈴として描写している(図23) [FROELICH 1954: 41]。

装身具の材料としては鉄のほかに真ちゅうや白銅が用いられる。トーゴ北部では、鉄よりは合金の方がはるかにぜいたくであったので、首飾り、腕輪などには赤銅色や白銅色の合成金属が用いられた。タンベルマ族の女性が一般に愛用している左手のように切れ目に入った首飾りは真鍮であり(図24)、手首にはめる幾何学模様の刻まれた腕輪は鉛と銅の合金である。腕輪には他にひも状の合金もある(図25, 26)。珍しい腕輪としては、真鍮、鉄、赤銅を交互により合わせたものが女性の装身具として使用されている(図27)。ただし金を材料にした装身具は知られていない。トーゴ山地民は黄金を輸出していたガーナのアシャンティ王国と地理的に接近できる位置にあったが、金を入手し、装身具を作ることはしなかった。指輪のような小さな装身具ももつ

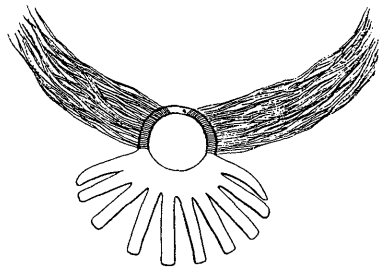


図24 首飾り

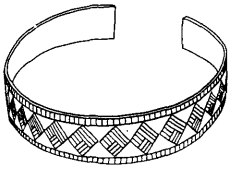


図25 腕飾り

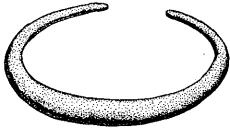


図26



図27 腕輪

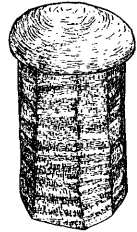


図28 ピアス

ばら鉄で製作されていた(写真6)。また身体変工を伴う装身具としては、唇飾りと耳飾りがある。素材が水晶である唇飾りは別稿でも取りあげたので[和田 1989a],ここでは省略し、耳飾りについて述べると、耳たぶに穴を開け、飾りをつけるのはタンベルマ族の場合は女性だけの習慣である。装身具としてはピアスのカテゴリーに入り、円柱形の木栓の上部に金属をはめ込んである。金属は軽いブリキ製のカバーである。(図28)しかし、こうしたコルク栓のようなピアスは消滅しつつあり、かわってリング状のピアスが若い女性の間を広まっている(写真7)。



写真6 指輪、デザインは伝統的だが、現在は真ちゅう製が多い



写真7 真ちゅう製のピアス

5) 楽 器 類

楽器類のなかにも鉄製品がいくつか含まれている。すべて打楽器で、基本的には踊りの伴奏に用いられる。まず、トーゴ北部で最も普及したのが指輪カスタネットである(写真8)。指輪状に形作った一対の鉄片を親指と人差し指にはめて打ちますが、体鳴楽器としての効果を強めるため、親指側の指輪は中空の身を備えている(図29)。単純な音具であるが、奏者を増していっせいに奏すると打楽器の威力を発揮する。そこで大勢の戦士が夜襲を敢行するとき、拍子を合わせていっせいに鉄輪を打ちならして敵方を威嚇したとい

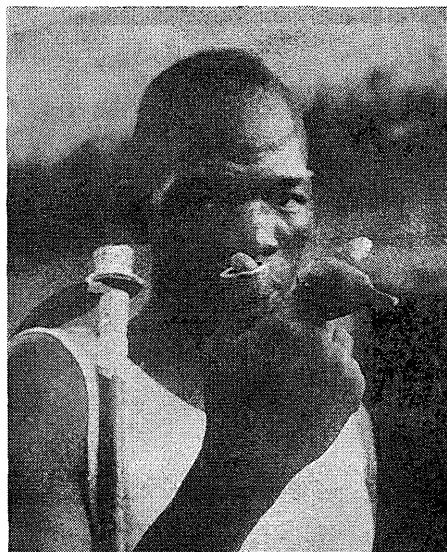


写真8 指輪カスタネット

う。事実、1897年、ドイツ軍がコンコンバ族の平定に向かったとき、包囲された野営地に、不気味に迫ってくるタムタムとカスタネットの響きに兵士たちは戦意を失い、敗退したと伝えられている [CORNEVIN 1969: 162]。

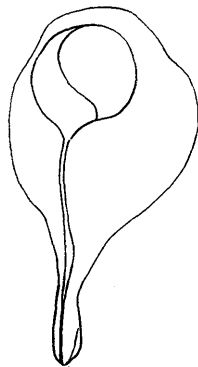
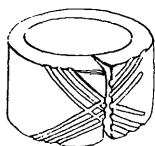


図29 指輪カスタネット

次に、女性専用の金属打楽器として風鈴のような舌で鳴らす鐘がある、鐘は祭事具の一つとして同じものでも使い方によって二通りあり、帽子や腰帯に紐でつないで体の動きで音を出す場合と鐘の頂上につけられた柄をもって振り鳴らす場合に分けられる。タンベルマ族の少女がイニシエーション期間に体につけて鳴らす鐘は前者の使い方(写真9)、音を出す装身具のカテゴリーに入るが、葬送の挽歌を歌いながら鐘を打ち鳴らすのは明らかに後者の楽器に分類される使い方である。ただし、現在、使用されている鐘はローカルな鍛冶屋の製作とは考えられない。材質が真鍮製で完全なチャペルの形に作られているからである。伝統的な鐘はむしろフレイリッヒが描画したコンコンバ族の鉄製ゴング状のものと思われる(図30)。カスタネットと



写真9 成女式の装身具，帽子の左右につるされた鈴に注意

同じように指輪を用い，外側から鳴らすもので，頂上に柄はなく，鎖がついているのが注目される。おそらくタンベルマ族も伝統的には同様な鐘を所持していたと思われるが，調査段階ではそうした形状の鐘が確認できなかった。

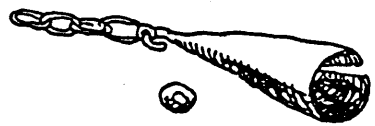


図30 コンコンバ族の鐘
[FROELICH 1954] より

6) その他

ほかにも，伝統的な鉄具で消滅してしまったものがあると考えられるが，まだ女性（たいがい老婆）の管理によって現に使用されている出産時の刃物として，へその緒切り（写真10）がある。くつべら状の形態で一方に鋭利な刀が付けられている。この刃物は，身体に傷痕を



図31

施すためにも用いられている。特殊な用途から女性の部屋に保管されている唯一の鉄製品である。

同様に、まだ消滅してはいないが、使用者が老人に限られているものに伝統的な煙管がある（図31）。土製の雁首、竹の羅宇そして吸い口から成り立っており、雁首と羅宇の接続、吸い口と羅宇の接続そして吸い口そのものに鉄あるいはアルミ銅などが使用されている。



写真10 ヘその緒切り

5. 鍛冶師と鉄製品

以上述べてきたさまざまな鉄製品は、すべて伝統的にローカルな鍛冶師によって製作されてきた。鍛冶師は北部諸族それぞれ別個に存在し、その起源、性格、権威などに関して部族ごとに特徴がある他、鍛冶技術にも微妙な相違がみられる。ただ現段階では、まだ、北部諸族の鍛冶業について十分な調査データが集まっていないのでタンベルマ族の鍛冶師を通して北部諸族の鍛冶師の諸特性と鉄製品との関係を明らかにしてみたい。

まず、鍛冶師が特殊な職人集団を構成していることは一般にもよく知られており、その起源はたいがい神話などによって裏付けされている。カブレ族では、天空から降下した最初的人类は猟師であると同時に農夫であったといわれている。彼は鍬と鋏をつくることを知っており、出生した子どもが成長し、結婚したとき、鍛冶師クランが創設されたと伝承のなかでうたわれている [VERDIER 1982: 192]。

カブレ族には現在レフテ (*Lehute*) とクピンジャオデ (*Kpinjaode*) という二つの鍛冶師クランが存在する。鍛冶師の人数はそれほど多くはなく、主としてチャレ (*Tchare*)、ヤデ (*Yade*)、ピヤ (*Piya*)、チチャウ (*Tchitchau*) に住んでいる。鍛冶小屋には二筒式ふいごが設置され、通常、子どもが交互に革袋を圧縮することにより送風し、炭火をおこして鉄に熱を加え、加工にとりかかる。石のうえにおかれた真っ赤に焼けた金属は打撃を加えられ、必要な形に整えられていく。カブレ族の製作した鉄製品のなかでは、鋏と包丁の評判が高く、北部トーゴにとどまらずベニンやガーナに輸出されていった。

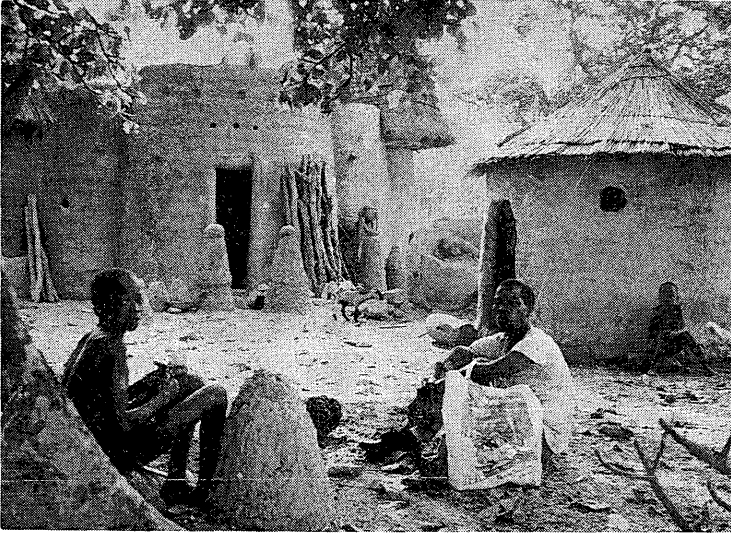


写真11 岩形住居の敷地内にたてられている鍛冶小屋



写真12 ふいごに用いる皮袋を製作している



写真13 土製ふいごで炭火をおこし、鉄を燃して装身具をつくる場所

タンベルマ族の鍛冶師もまた二筒式ふいごを使用している。カブレ族のように鍛冶師クランは存在しないが、鍛冶小屋はコマトーク (*koumatoukou*) といい、外壁が円筒形 (内径約 2.25 m) で、円錐形の草葺屋根をのせ、たいてい、岩形住居の前庭の一角にたてられている (写真11)。入り口に立つと手前の地面にテコの石台が置いてある。石台のまえは木炭を燃やす炉になっていて、直前に小さな送風孔が開いている。送風孔は埋蔵された左右二個の土製パイプが一つに集合したもので、背後に革袋を操作する半球形の送風装置が作られている。皮袋といっても、正確には細い棒の先端に傘のようにヤギ皮を結びつけ (写真12)、それを裏返して半球形の丸く盛り上げた土まんじゅうの中に半分埋め込まれた送風土管にかぶせるのである。送風は半球形の盛り土のうえに乗った鍛冶師の子供が棒を両手に持ち左右交互に上下することによって操作される (図32)。こうした備え付けの送風装置は西スーダン各地にみられるものでパレオ・スーダン文化に基礎があるように思われる。

現在、タンベルマ族のなかにどのくらい鍛冶師がいるのか人数はまったく把握できないが、筆者が調査している人口6,404人 (成人のみ) のワルテマ地区には一軒の鍛冶屋が存在する。だが、農業のかたわら乾季の副業として鍛冶業が行われており、首飾り、腕輪、指輪のような小さな装身具が製作されているだけで (写真13)、鋏をは

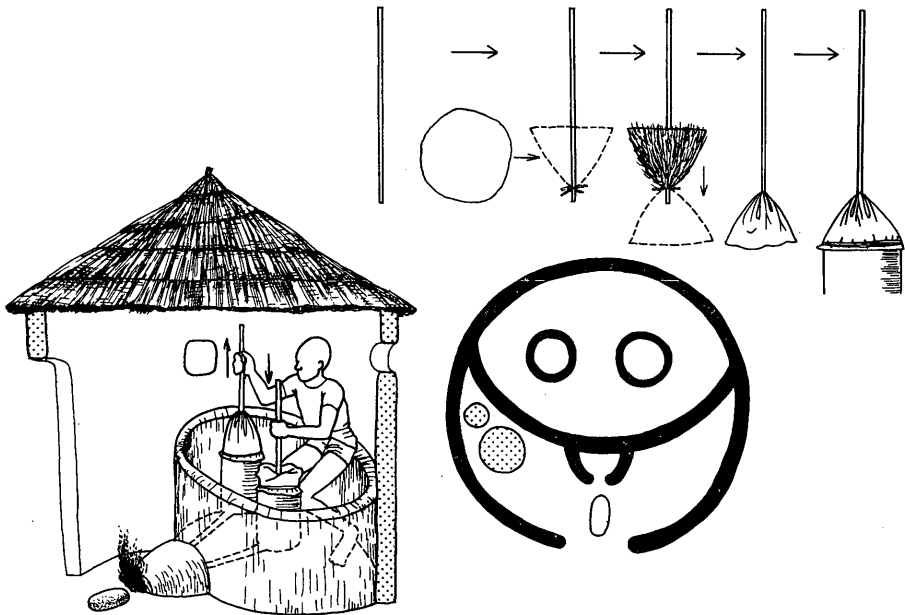


図32 鍛冶小屋の構造と皮袋のつくり方

じめ農耕に必要な鉄製用具は隣接するソンバ族やカブレ族から輸入している。タンベルマ族は昔から実用的な鍛冶業は東タンベルマと呼ばれるソンバ族に依存していたのである。西タンベルマの伝承によると、「われわれの祖先は鉄で装身具を製作するだけで、鍬のような生産具を作らなかった」という。それ故、鍬は他部族から輸入するのがしきたりになっていて、現在もその伝統を忠実に守っている。

鍛冶師はタンベルマ語で「オマタ」(*Omata*)といい、すべて男である。*ma*は創造するという意味の語幹である。神話によると、タンベルマ族の鍛冶師は「タウォンタ」(*lawante*)と呼ばれる羚羊に起源があり、とりわけ、ダイカー (*duiker*) に結びついている。この動物は羚羊のうちでも体軀が小さいが、抜群の透視力をもつといわれている。神クウィエ (*Kouïye*) が粘土から人間を形作り、鉄鉱石から羚羊を創り出したとき、最初の溶鉱炉は羚羊に所属し、鉄が独占的な贈物となった。羚羊は足で高炉に火をともしることができるといわれている。実際、羚羊が岩だなを駆けるとき、あたかもひづめから放射するように火花が飛び上がるのが見える。そして、もし、人間が千里眼の持ち主なら、森の中に入ると、羚羊の溶鉱炉が見えるという。羚羊は自分自身のために装身具、武器、護身薬をつくっている。鍛冶業で製作された薬が矢を呑み込み、羚羊を守ってくれる。狩猟で殺されたときは、羚羊自身が困難な森の生活にいやになり、ことさら自身で死を招き、人間の家で快適な暮らしをしたいと希望したと解釈されている。解体された内臓を取り出すと、不消化な鉄鉱石が見つかるといわれる。

このように、猟師に仕留められた羚羊の霊は、彼の家に棲み着き、森に棲んでいたときと同じように鍛冶業を続けるためにふいごをつくってくれるように夢で要望する。通常、火事の夢は羚羊のせいだと占い師に判断される。また家族の誰かに火傷を負わせて自分の願いを伝えることもある。そのほかにも羚羊のせいで家族が不幸なめに合うこともある。家族はそうした怪我や火傷を治療するには占い師の指示にしたがって鍛冶師から特別な取り計らいを受けなければならない。その1つは、鍛冶師の権利を買うことであり、その2は、火傷などの傷が癒えたもの(年齢的に適切でないときは家族の別な構成員)が精錬技術を学ぶために鍛冶師に弟子入りすることである。修業が終わると、鍛冶師と羚羊がスポンサーになり、自分の敷地内に鍛冶小屋が建てられ、中にふいごが作られる。以後、新しく出生した子供たちは羚羊の保護を受け、健康に育つといわれている。故に、タンベルマ族が身に着けている鉄製装身具は、羚羊のさまざまな部位がデザインされていて、この動物との霊的な結び付きが象徴化されている。

羚羊は家族の守護者である。鍛冶小屋のなかの土のマウンドは聖なる祠であり、鍛

冶業の本祖、羚羊の霊を祀るために建てられたのである。したがって、鍛冶小屋があっても祠として羚羊を祀った象徴的建築物であり⁸⁾、必ずしも鍛冶業を行なっているとはかぎらない。タンベルマ族の場合、鍛冶業は農耕ではなく狩猟に結びついていたのである。タンベルマ族がカブレ族の製作した高価な鋏を購入するのは、少なくとも西タンベルマ地方では鍛冶師が農具を製作しなかったからである。言いかえると、タンベルマ族の鍛冶師は羚羊によって引き起こされた病気の治療師であり、鍛冶小屋の壺のなかには治療のための呪薬（草や根）が常備されている。装身具の製作も治療行為の一環である。たとえば、最も頻繁にみられる二重渦巻き形のデザインは下痢にかかった子どもの装身具である。また、病気治療のほかには子どもの誕生と名づけにちなんで製作される鉄製装身具もある。さらに、蛇に似せた渦巻きの腕輪は成人式リフォニ（*Lifoni*）の祭司の上腕にはめるために製作された特別な装身具である。

このように、タンベルマ族の鍛冶師が製作する鉄製品が装身具に限定されているのは、神話を背景に治療と儀礼に結びついた鍛冶師の伝統が生活の深部まで強く浸透しているからである。

6. 結 語

以上述べてきたとおり、トーゴ北部の歴史は鉄生産と鍛冶業を抜きにして正確な理解を得ることができない。鉄は、主としてバッサリ山中に居住するピ・チャンベ族によって生産されたが、鍛冶師は北部諸族すべてに存在し、各種の鉄生産が製作されてきた。とりわけ、ギニヤ森林部（ガーナ南部、ベニンやトーゴの南部）やボルタ平原地方（ガーナ北部）に諸王国が勃興すると、種類も多くなり、量産されるようになった。

武器を作るには良質な鉄が必要である。バッサリ産の粗鉄は精錬されて鋼になり、武器類の原料になった。アフリカでは鋼が生産されなかったとするラーゲルクラントの考え方はわたしは採らない [LARGERCRANTS 1954]。現存するアフリカの武器は、たぶんアフリカの鋼で製作されたものと思われる。武器は軍事装備としてある程度の数を備えなければ意味をなさない。ヨーロッパから輸入された鋼鉄は高価で、貧困なパレオニグリティック山地民が簡単に購入できたはずがない。ちなみに、製品化され

8) 「羚羊の皮」は、内部の仕切り壁に刻まれたデザインによって表現される。「その肺と呼吸」は、中央部の通風孔パイプから下部に空気が送り出される半球形の土製装置。「鼻」は鍛冶作業で火のつく穴である。「ペニス」は中央部の通風孔。「舉丸」は空気に満たされた動物皮のふいご。「尾」は2筒式ふいごのハンドル部分で表わされる [BLIER 1984: 60]。

た鉄は次のような市場価格で取り引きされていた。大きな斧1 = 宝貝2000個, 小さな斧1 = 宝貝1000個, 大きな鋏10 = 大きな羊1頭, 小さな鋏5 = 小ヤギ1頭, 斧の刃1 = 宝貝400個, 包丁1 = 宝貝50~100個, 鉄製環(直径 40 cm) = 宝貝4000個 [MERCIER 1968: 325]。アタコラ山地やモノ河流域に分布していた山地民や河辺民は1~2日行程の位置にあるバッサリやカソーカノから比較的安いローカルな鉄を買い付け、銅に精錬して武器や農具を製作していた。

しかしながら、山地民と河辺民とのあいだには相互に経済的な交流があり、作られた鉄製品にもかなりの共通性が見られる。ただ、タンベルマ族の鍛冶師が装身具しか製作しなかったように、鍛冶師の仕事には部族ごとのローカル色があり、互いに不足なものを補うために部族を越えて鉄製品の売買が行なわれていた。カビエ族の鍛冶職人たちは鋏や斧その他の農具類を持参し、年に一度、西タンベルマ地方を巡回し、家畜と交換している。中央集権的な王国支配から逃れていた山地民や河辺民はパレオニグリティックな伝統のうえに生活しており、鍛冶師こそ土地の支配者であった。

こうして、トーゴ北部諸族は王都ソコデを中心に生活しているコトコリ族をのぞくと、イスラム文化の影響は稀薄である。つまり、ソコデ以北の鉄器文化はパレオニグリティックの製鉄と鍛冶を中心に展開してきたのであり、共通の技術体系が見られるのである。それは、軍事技術としては鉄砲に及ばなかったが、伝統技術としては高度な発達段階にあったことは確かである。

文 献

- AHN, P. M.
1970 *West African Soils*. Oxford University Press.
- BARROS, P. L. de.
1986 *Bassar: A Quantified, Chronologically Controlled, Regional Approach to a Traditional Iron Production Centre in West Africa*. *Africa* 56(2): 148-173.
- BAUMANN, H. and D. WESTERMANN
1964 *Les Peuples et les Civilisations de l'Afrique*. Paris: Payot.
- Blier, Suzanne Preston
1984 Antelopes and Anvils Tamberma Works of Iron. *African Arts* 17(3): 58-63.
- BOHANNAN, Paul
1964 *African Outline*. Penguin African Library, Penguin Books.
- CORNEVIN, R.
1969 *Histoire du Togo*. Paris: Editions Berger-Levrault.
- FAGG, W.
1952 Ironworking with a stone hammer among Tula of Northern Nigeria. *Man* 52(76): 51-53.
- FLINT, J. E.
1976 Economic change in West Africa in the nineteenth century. In J. F. A. Ajayi and

- Michael Crowder (eds.), *History of West Africa*, vol. 2, London: Longman Group Ltd., pp. 380-410.
- FRANCIS-BOEUF, C.
1937 L'industrie autochtone du fer en Afrique Occidentale Française. *Bulletin du Comité d'Etudes Historiques et Scientifiques de l'Afrique Occidentale Française* 20: 403-464.
- FROELICH, J.-C.
1968 *La Tribu Konkomba du Nord Togo*. IFAN DAKAR.
- GOUCHER, C.
1981 'Iron is iron' til it is rust: trade and ecology in the decline of West African iron-smelting. *Journal of African History* 22: 179-189.
- GOODY, J.
1971 *Technology, Tradition and the State in Africa*. Cambridge University Press.
- 川田順造
1979 『サバンナの博物誌』 新潮選書。
- KENSE, F. J.
1985 The Initial Diffusion of Iron to Africa. In R. Haaland and P. Shinnie (eds.), *African Iron Working*, Norwegian University Press, pp. 11-27.
- KNOLL, J. Arthur
1978 *Togo under Imperial Germany 1884-1914: A Case Study in Colonial Rule*. Stanford: Hoover Institution Press.
- LARGERCRANTS, S.
1954 *African Methods of Fire-Making*. Upsala: Studia Ethnographica Upsaliensia, X.
- LUSCHAN, F. von.
1909 Eisentechnik in Africa. *Zeitschrift für Ethnologie*, XLI: 22-59.
- MERCIER, Paul
1968 *Tradition, changement, histoire: Les "Somba" du Dahomey*. Paris: Septentrional.
- NORRIS, Edward Graham
1984 Atakora Mountain Refuges Systems of Exploitation in Northern Togo. *Anthropos* 81: 109-136.
- POLE, L. M.
1982 Decline or Survival? Iron Production in West Africa from the Seventeenth to the Twentieth Centuries. *Journal of African History* 23: 503-513.
1985 Furnace Design and the Smelting Operation: A Survey of Written Reports of Iron. In R. Haaland and P. Shinnie (eds.), *African Iron Working—ancient and traditional*, Norwegian University Press.
- SASSOON, H.
1964 Iron-smelting in the Hill Village of Sukur, North-Eastern Nigeria. *Man* 64(215): 174-178.
- VERDIER, Raymond
1982 *Le Pays Kabiye: Cite des dieux—Cite des hommes*. Paris: Editions KARTHAL.
- 和田正平
1987a 「スーダン・サバンナ帯における生業形態の特質—半農半牧タンベルマ族の事例」 和田正平編著『アフリカ 民族学的研究』同朋舎, pp. 1033-1069
1987b 「トーゴの鉄ものがたり」『同朋』108, 同朋舎。
1989a 「アフリカにおける口もとの美」『化粧文化』20 ポーラ文化研究所, 57-63。
1989b 「トーゴ北部諸族の技術誌をめぐる諸問題」『国立民族学博物館研究報告』13(3): 583-614.
- WILD, R. D.
1936 Iron Disc Currency from Ashanti. *Man* 36(99): 78-79.